

## コメント

### 野田春美 話しことばにおける否定辞を含む表現の使用をめぐる

本稿では、3つのコーパスの調査に基づいて、話しことばにおける否定辞を含む表現の使用傾向の提示と、それについての考察がなされている。コーパスから得られた使用傾向の提示そのものも興味深いが、本稿で注目してほしいのは「なぜこれらの形式の調査をおこなうのか」という著者の動機が明確な点である。5節で日本語の漫画とそのフランス語訳についての考察がなされることを、唐突に思う読者もいるかもしれない。しかし、それは否定辞を含む表現が、「話し手の判断を前面に出すことを避ける方向の、否定表現の使用」という日本語としての特徴を持つとする結論から考えれば、「日本語だけを分析しては、日本語の特徴かどうか明らかにできない」という著者の狙いが見えてくるだろう。コーパス研究は「調べただけ研究」と揶揄されることもある。そう言われたいためには、「なぜこれらの形式の調査をおこなうのか」という著者の動機が重要である。参考にしてほしい。

(A.M.)

### 牧久美子 疑問文「なんですか」における「のだ」と 高圧的ニュアンスの出現傾向

日本語学習者による「のだ」の多用についての指摘は珍しくなく、これまでも様々な観点から学術的に考察されてきた。しかしながら、本論文でも述べられているように、「のだ」の意味・機能や用法は複雑であり、一見すると互いに矛盾するようにも思える考察結果が示されることもあった。本論文が考察の対象とする、疑問詞疑問文における「のだ」も、その例外ではない。そのような中、本論文は、高圧的ニュアンスを帯びやすい、疑問語「なに・なん」が述語の位置にある解答要求文に焦点を絞り、文の型を軸に「のだ」の出現頻度の違いや高圧的ニュアンスの出現頻度について考察を加えている。研究課題の設定が明瞭であることはもちろん、データの解釈から考察結果の提示に至るまで、説得力のある展開がなされており、読んでいて爽快さすら感じられる論考である。こうした納得のいく展開は、日本語教育への応用を視野に入れた筆者の一貫した立場によるところも大きいだろう。今後のさらなる展開が期待される論考である。

(S.P.)

### 馬 文先 「～ちゃう」の使用傾向と その意味・機能への考察 ——「～てしまう」との比較を通して

「～ちゃう」は、「～てしまう」の縮約形であることに違いはないが、縮約形として扱われることで、多くの人が「なんとなく」感じてはいた「～てしまう」にはない特有の意味・機能の部分は見過ごされてきたのではなかろうか。本論文は、この「なんとなく」の部分を可視化、具体化したところに価値があると思われる。具体的には、「～ちゃう」は、特定の場面において、「～てしまう」が帯びかねない「望ましくない」という評価や「課題の解決」に伴う負担感などを回避するために使用し得ると指摘する。日本語教育の現場においても、「～ちゃう」は「～てしまう」とほぼ同じで、話し言葉（特に友達との会話など）においては「～てしまう」が「～ちゃう」になることがあるというような扱いであるが、今後は「～ちゃう」についても日本語の授業などでどのように扱うべきか、検討する必要があると思われる。

(Y.K.)

### 上出大河 植民地期台湾における 児童の授受表現使用の諸相 ——『全国小学児童綴方展覧会』(1936)採録「綴方」の調査から

授受表現を例に、植民地期台湾の児童における日本語の使用実態が報告されている。特に、内地系の児童は与格名詞句が明示的ではない例など多様な授受表現の産出が認められる、本島系の児童は「場面判断能力」の不足による適格ではない授受表現の産出も認められるなどの点が報告されている。これらは、内地系の児童と本島系の児童の性質からすると当然のこととも言える。しかし、調査方法や調査結果の分析などが非常に適切であることも相まって、当該の時期、及び当該の地域における日本語の使用実態に関する貴重な資料の一つを提供してくれていると言えよう。日本語・日本語教育の諸相という観点から、今後も、授受表現に限らず、また児童に限らず、植民地期台湾の日本語の使用実態が明らかにされていくことを期待したい。

(Y.K.)

末繁美和・ダンタイ クインチャー  
タンデム学習を通したベトナム人日本語学習者の視点表現の発達  
——日本語母語話者とのやり取りが学習者の語りに及ぼす影響に着目して

本論文は、日本語学習者にとって習得が難しい項目の一つである視点表現に注目し、日本語母語話者と日本語学習者が1対1で行うタンデム学習が、日本語学習者の視点意識を高めるうえで効果的であるかどうかを検証したものである。タンデム学習の中で、日本語学習者に見られた視点表現の誤用や非用に対して、日本語母語話者がフィードバックを行うセッションを設け、その前後で、日本語学習者の視点表現の使用傾向や視座の統一に変化が見られるかを観察している。このような研究手法は大変興味深く、そこから得られた変化に関する考察にとどまらず、指導に用いる教材への工夫といった、日本語教育への具体的な提案にも踏み込んでおり、意欲的な論考となっている。フィードバックによる変化の持続性や、視点表現の適切な運用を促す効果的なフィードバックのあり方など、指導に直結する側面についてのさらなる考察も期待される。今後の展開に注目したい。  
(S.P.)

徐 単 中国語を母語とする学習者への指導に向けた前置き表現の考察  
——中日前置き表現の相違点に注目して

本論文は中国語を母語とする学習者が自然な前置き表現が使用できるようになることを目指すものである。研究手法として、コーパスから学習者の不自然な例、不適切な例を採集し、中国語の前置き表現との対照をとおして分析を行っており、自然な産出のためには発話意図に基づいた指導が必要であると述べ、考察を行なっている。前置き表現は配慮の表現として使われることが多く、先行研究では配慮という点に注目し分類が行なわれたものがあつたが、本論文では機能に注目している。そのうえで、前置き表現の分類を「情報提示型」と「態度表明型」に二分し考察を行っており、この点にオリジナリティがあるといえる。そして、日本語と中国語の前置き表現の違いによる問題には2つのタイプがあるとし、学習者に対する具体的な指導についても述べられており、今後、本論文の結果による学習者への指導の効果が期待される。  
(M.M.)

昂 燕妮 談話レベルから見た「ほめに対する応答」  
——日本語と中国語の初対面・友人同士の会話をもとに

会話において相手をどのようにほめるか、またほめられたときにどのように反応するかということは、談話研究でも重要なテーマとなっている。本研究ではこれを「ほめ」―「反応」のミニマルペアではなく、連続するターンの中でどのように反応が行われているかに着目した点に新規性がある。結果、「否定一貫型」は最も少なく、「組み合わせ型」が最も多いということが明らかになった。これは「ほめられた時にはそれを否定する」という単純な戦略は必ずしも主流ではないことを意味する。また、先行研究と比較してほめに対する「肯定」が増えていることや、日中両言語間で差異は見られなかったことなど、先行研究にない結果も得られている。今後は特に「組み合わせ型」の中で、ほめ手と受け手がどのような相互行為を行っているかを明らかにしていくことが課題になるだろう。  
(N.N.)

龔 詩雅 日中接触場面における異なる意見への応答方略  
——合意を目指す初対面・友人との話し合いをもとにして

合意形成を目指す会話において意見の衝突が生じると、母語話者同士であつても意見の調整が難しくなったり果ては人間関係にまで支障をきたしたりすることが起こりうる。まして、文化的背景の異なる話者同士で意見が衝突した際は、より困難な状況になることが予想される。本研究は母語場面ではなく、接触場面における異なる意見への応答方略を扱っている点に新規性がある。とりわけ、ある意見表明に対して、日中言語話者で表面的には同じタイプの応答発話をしていても、その発話意図が異なっていてその後の展開が異なる場合があるという指摘は興味深い。今回は合意に至らなかったケースも見られたが、フォローアップインタビュー等でどのような意図をもって発話したのかということや、相手の発話にどのような印象を抱いたかなどが分かると更に理解が深まるかもしれない。  
(J.A.)

---

河原里佳 日本語教育経験のない母語話者の相互調整行動と意識  
——接触場面と母語場面における初対面の母親間の会話から

会話において対話者同士が会話を維持するためにとる相互調整行動は、発話の周辺ごとにミクロ的な視点で観察されることが多い。本研究では会話全体を通してマクロ的な視点から観察している点が興味深い。そこでは、接触場面と母語場面両方の観察を通し、発話者が聞き手に対して抱くイメージが会話途中で変化したことに伴う相互調整行動の変化が非母語話者との会話と母語話者同士の会話の両者にみられることを指摘している。就学前の子を持つ親同士の子育てに関する日常的な会話トピックとなっており、近年、生活者の日本語が注目される中、地域社会において海外ルーツの住民とのコミュニケーションを考える際に参考になる研究となっている。本論文は事例研究でありデータが限られてはいるが、今後も同様の研究を積み重ねることで精緻化が進むことが期待される。(J.A.)

---

近藤智子 日本語母語話者の述語末における読点使用の分析  
——中国人学習者の句読点の問題解決に向けての整理

本論文は日本語文における句読点の問題を扱っている。研究の動機は中国語母語の日本語学習者の不適切な読点の使用であるが、この問題を日本語と中国語の句読点使用の違いによる母語の影響と片づけるのではなく、日本語母語話者の読点の実際の使用実態を調査することで、中国語母語の日本語学習者の読点の使用は不適切なのかどうかも含め、考えようとするものである。コーパスを使用した使用実態調査により、日本語母語話者は基本的に述語末には句点を使用しているが、読点も使用されていた。そして、述語末に読点が使用される場合には、3つのパターンがあることを明らかにしている。述語末に読点使用に関する3つのパターンが明らかになったことにより、今後、作文教育などで、どのように句読点の指導をしていくか示唆的なことがらを論じた論考であるといえる。(M.M.)

---

劉 羅麟 日本語のアクセントにおける学習者の産出と内省  
——初級名詞、人名、複合名詞を中心に

アクセントの習得研究は多くの蓄積があるが、本研究では初級名詞、人名、複合名詞とポイントを絞った形で授業を行い、授業の前後に見られた学習者の問題点を報告している。あわせて、学習者のアクセントに対する意識を調査している点にも特色がある。ポイントを絞ることは授業実践をする上で必要なことであるが、それが教育上効果的でもあることを本研究の結果は示している。また、それは研究の観点から学習者にとっての難易度を議論する上でも有効である。授業実践と学習者音声の分析、そして意識調査が連動しており、巧みにデザインされた研究であると評価できる。(N.N.)

---

趙 氷清 中国人日本語学習者のアクセントの弱化的生成および判定基準  
——限定関係にある2要素からなる句の場合

日本語の単語アクセントについては教えていても、二つ以上の単語が連続する場合のアクセントの変化についてはほとんど教えていないため、イントネーションが不自然になるという問題意識は、中国の日本語教育現場からの興味深い提案と言える。特に、郡(2012)の「音響判定」に対して、「学習者の発音は聴覚上自然であれば、母語話者そっくりに発音しなくてもいい」という考えに基づき、「聴覚判定」を導入して調査した点にオリジナリティがある。従来の研究では、アクセントとイントネーションにそれぞれ着目するものは少なくないが、句レベルでのアクセントの弱化に焦点を当てるものは少ない。本稿は日本語研究としてアクセントの弱化の判断基準について論じるだけでなく、日本語教育研究として学習者による産出と発音指導の効果についても論じている点において、本誌の趣旨に合う意義ある研究だと言える。(A.M.)